

田野町文化財調査報告書第1集

よし が さこ
芳ヶ迫 第1遺跡

県営農地開発事業前平地区に伴う埋蔵文化財発
堀調査概報

昭和59年3月

田野町教育委員会



芳ヶ迫第1遺跡空中写真全景

序

田野町教育委員会は宮崎県の委託を受けて、昭和58年度から前平地区県営農地開発事業地内に所在する遺跡の発掘調査を実施しています。初年度は芳ヶ迫第1遺跡の発掘調査を実施しました。本書はその概要報告です。

本年度調査では縄文時代早期の集石遺構の検出や、旧石器時代の集石遺構の検出等がありました。又縄文時代早期のものと思われる環状石斧や、50数基の集石遺構が検出されました。これは宮崎県における貴重な研究資料になることと存じます。

調査は宮崎県教育委員会をはじめ、奈良教育大学教授市川米太氏、元高知大学教授中村純氏、広島大学理学部地質学鉱物学教室柴田喜太郎氏、県文化財保護審議会委員石川恒太郎氏、日高正晴氏等のご指導を多大のご協力によって行ったものであります。特に調査計画から概報書の作成にあたって、全面的にご苦労いただいた県文化課の面高哲郎氏に深く謝意を表する次第です。

また、発掘調査に際しましては、中部農林振興局・県農業開発公社・地元町民各位から積極的なご協力をいただき心からお礼申し上げます。

昭和59年3月31日

田野町教育委員会
教育長 種子田 荣 幸

例　　言

1. 本書は、前平地区の県営農地開発事業に伴い、昭和58年度に実施した芳ヶ迫第1遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 発掘調査は、田野町教育委員会が主体となり、県文化課主任主事面高哲郎が担当した。
3. 本書に使用した図の作成は面高、谷口武範、[REDACTED]があたった。
4. 本書の図の製図は、面高、染矢があたった。
5. 本書に使用した方位はすべて磁北である。
6. 本書の執筆、編集は面高があたり、元高知大学文理学部教授中村純氏、広島大学理学部地質学試物学教室柴田喜太郎氏の玉稿をいただいた。
7. 出土遺物は、田野町教育委員会で保管している。

目　　次

I はじめに

1. 調査に至る経過 1
2. 遺跡の立地と環境 1

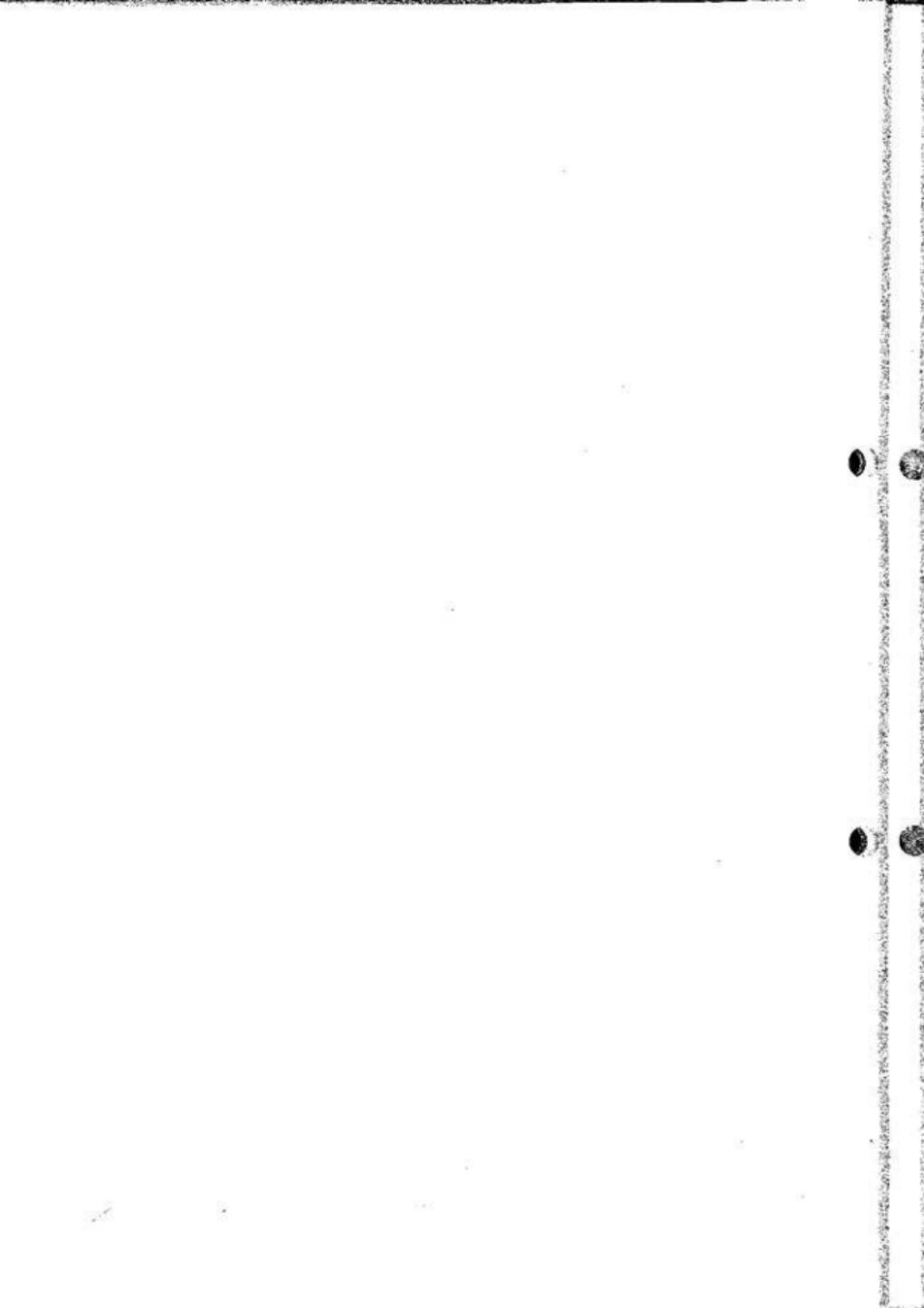
II. 調査の概要

1. 調査区の設定と概要 4
2. 包含層の状態 4
3. 旧石器時代の遺構と遺物 7
4. 繩文時代の遺構と遺物 7

III.まとめ

〈付　編〉

- 芳ヶ迫第1遺跡の花粉分析的研究 17
田野町札ノ元遺跡試掘溝に見られる堆積物の検討 24



I. はじめに

1. 調査に至る経過

昭和57年度から田野町前平地区において県営農地開発事業が行われている。事業区内の埋蔵文化財の調査は、昭和56年4月に分布調査、昭和57年5月には試掘調査を行い、3ヶ所の遺跡が存在することが判明した。宮崎県中部農林振興局と埋蔵文化財の保護について協議を行った結果、札ノ元遺跡（旧1号地）は設計変更により一部は現状で保存されることとなつたが、芳ヶ迫第1遺跡（旧3号地）、芳ヶ迫第2遺跡（旧4号地）については事業施行上、現状保存は困難であり、消滅する部分については記録保存の措置をとることになった。また事業の工程についても発掘調査期間を考慮して、遺跡が確認されていない西方から行うことになり、芳ヶ迫第1・2遺跡は昭和59年度、札ノ元遺跡は昭和60年度工事を行うことになり、発掘調査は、昭和58・59年の2ヶ年にかけて行うことになった。

発掘調査は、昭和58年度は芳ヶ迫第1遺跡を行うことになり、昭和58年7月11日から昭和59年2月29日まで実施した。調査は、田野町教育委員会が主体となり、県文化課主任主事面高哲郎が担当した。

調査の結果、芳ヶ迫第1遺跡は、旧石器時代、縄文時代（早期・晚期）の遺跡であることが判明し、特に縄文時代早期の集石遺構が54基発見されている。集石遺構の中には床面に数石を有するものが2基あり、その中の1基については遺構の取り上げを昭和59年度行うことになっている。

注1. 面高哲郎・長津宗重「前平地区遺跡発掘調査報告」宮崎県文化財調査報告書第26集

1983。

2. 遺跡の立地と環境

田野町は、宮崎市の南西約10kmにあり、町域を田野盆地を中心とする町である。前平地区は、田野盆地東部の前平山の北西裾に位置し、当地は、西面する扇状地である。各所には湧水があり、それは小川となり井倉川へ注ぐが、この小川等により扇状地は開析され、北西へ延びる丘陵、丘陵性台地が発達している。芳ヶ迫第1遺跡は、その1の丘陵上に立地する。

前平地区内に所在する遺跡は、その他九州縦貫自動車道建設に伴う分布調査の際確認されていた箱式石棺（芳ヶ迫第2遺跡）、昭和57年の調査で発見された縄文早期の札ノ元遺跡や

昭和58年発見された又五郎遺跡などがある。当地区は、各所に湧水があり、また、低丘陵や丘陵性台地等の地形は、縄文時代の遺跡の立地としては好条件を備えていると言えよう。

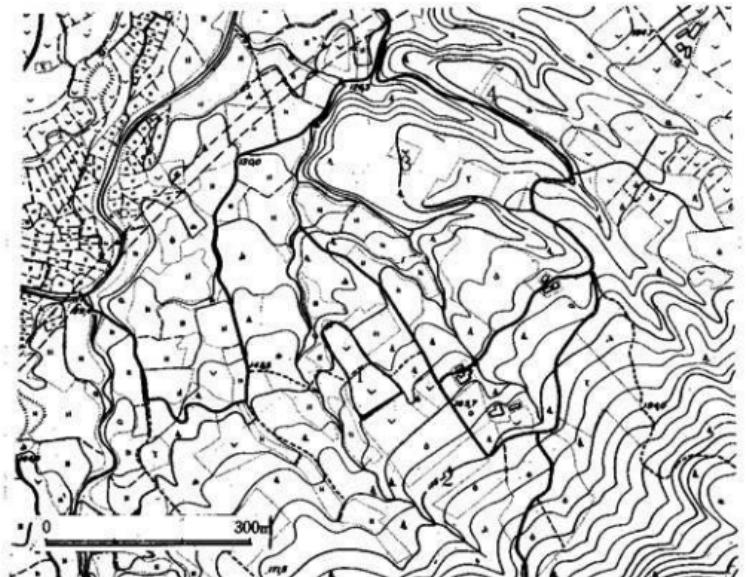
一方、田野盆地内に所在する遺跡は、現在まで弥生・古墳時代の遺跡はあまり知られていないなかで、ナイフ形石器を出土した旧石器時代の萩ヶ瀬遺跡（宮崎大学実習林入口）、昭和38年、賀川・鈴木両氏により調査された縄文後期の青木遺跡²、昭和53年、県教委により調査された縄文後期の黒草遺跡³など縄文時代の有望な遺跡がある。

注1. 宮崎県教育委員会「九州縦貫自動車道(宮崎線)関係遺跡分布調査報告書」1968。

2. 鈴木重治「宮崎県田野町青木遺跡の調査」「日本考古学協会昭和38年度大会研究発

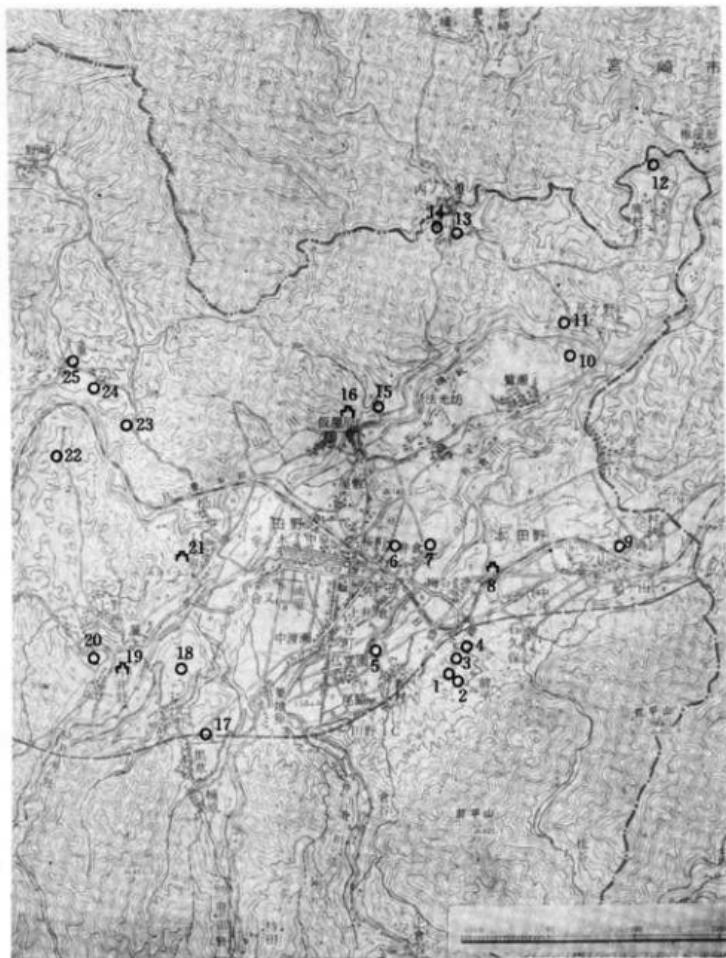
表要旨」1963。

3. 北郷泰道「黒草遺跡」「九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書(3)」宮崎
県教育委員会 1979。



第1図 遺跡周辺の地形

1. 芳ヶ迫第1遺跡 2. 芳ヶ迫第2遺跡 3. 札ノ元遺跡 4. 又五郎遺跡



第2図 遺跡分布図

1. 芳ヶ迫第1遺跡
2. 芳ヶ迫第2遺跡
3. 札ノ元遺跡
4. 又五郎遺跡
5. 青木遺跡
6. 桜町遺跡
7. 井倉洞穴遺跡
8. 梅谷城址
9. 船ヶ山遺跡
10. 灰ヶ野遺跡
11. 灰ヶ野地下式横穴
12. ズクノ山遺跡
13. 堀口B遺跡
14. 堀口A遺跡
15. 萩ヶ瀬遺跡
16. 田野城址
17. 黒草遺跡
18. 高野原地下式横穴
19. ヒグカン城址
20. 片野遺跡
21. 天建社城址
22. 九野遺跡
23. 前畠遺跡
24. 八重A遺跡
25. 八重B遺跡

II. 調査の概要

1. 調査区の設定と概要

調査は、昭和57年5月の試掘調査の成果に基づき、集石遺構が分布すると考えられる範囲の全面を行うこととした。試掘調査では、集石遺構は第V層（黒褐色土）で確認されていたので第IV層までを重機を使用して剥ぐこととしたが、第III層（アカホヤ）まで除去した後、焼石のまとまりが数ヶ所で確認されたので重機の使用はこの面までとした。

当初、調査区の地形は、最大幅70m前後の平坦面を有する丘陵性台地的様相を呈していたが、第III層まで除去後の地形は、中央部に凹地が走り2つの丘陵に区分された。そこでこの面で1辺10mのグリットを設定し、北から南へA、B………区、東から西へは1、2………区と呼称することにし、また、同面で100分の1の地形測量を行った。

第IV層面には径2~3mの円形ないし梢円形プランを呈する土質の異なる部分があり、その層のあり方は、西方よりアカホヤ、黄褐色土、黒褐色土に区分され、焼石は黒褐色土中に帯状の状態で観察された。この層のあり方は、当地の基本層序と一致するものであり、これは、自然現象による地層の回転で、第IV層面で確認された焼石のまとまりは、この結果であると考えられる。

調査により検出された遺構は、旧石器時代の集石遺構、縄文時代早期の集石遺構、焼石群、土壇、縄文時代晚期の堅穴遺構（住居跡？）、土壇、円形堅穴等である。

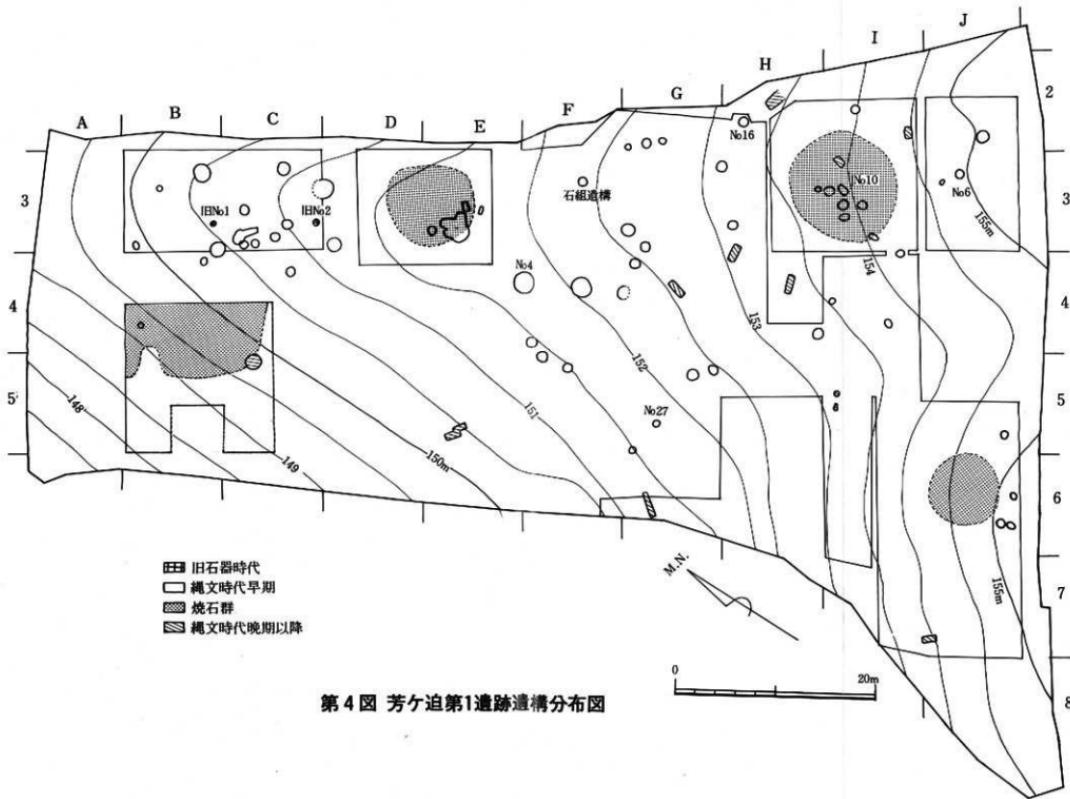
2. 包含層の状態

芳ヶ追第1遺跡の基本層序は、第I層が表土（旧耕土）、第II層は黑色土、第III層はアカホヤ（第1オレンジ）、第IV層は小白斑を含む黄褐色土、第V層は小白斑を含む黒褐色土、第VI層は褐色土、第VII層は第2オレンジを含む疊層となっている。

遺物は、第VI層最下層から第VII層上層で旧石器時代遺物が出土し、第IV層から第V層上層



第3図 C-3-1区西側土壇



第4図 芳ヶ迫第1遺跡遺構分布図

で縄文時代早期の遺物が出土している。縄文早期の集石遺構は第V層で検出されている。縄文時代晚期の遺構は第IV層面で検出され、それに伴って遺物が出土しているが、いわゆる遺物包含層は確認されていない。

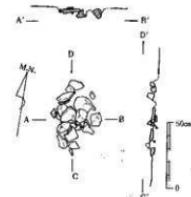
3. 旧石器時代の遺構と遺物

遺構

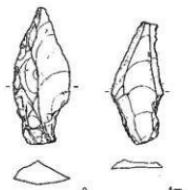
旧石器時代の遺構は、集石遺構がB-3区で1基、C-3区で1基の計2基が検出されている。検出された層は、第Ⅳ層の第2オレンジを含む礫層の直上である。B-3区の1号集石遺構は、擎大の焼石が約20個が椭円状(長径60cm、短径40cm)に集石している。下部に土塊等は認められなかった。C-3区の2号集石遺構は、1号に類似したものである。集石遺構の周辺では焼石の散石も見られた。

遺物

遺物は、2基の集石遺構間のC-3区で径5mmほどの範囲にまとまりを呈して分布していた。砂岩製の剥片尖頭器(2)、安山岩系の綫長の剥片を素材としたナイフ形石器(2)、チャート製の三棱尖頭器(1)、頁岩や流紋岩の剥片等が出土している。第6図の剥片尖頭器は、剥片の基部の両側縁辺に刃溝し加工を加えている。尖端部はいずれも欠損しており、1は規長6.8cm、厚さ14.5cm、2は規長6.1cm、厚さ0.5cmを測る。



第5図 集石遺構No.1



第6図 石器実測図

4. 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構・遺物は早期と晚期の二時期のものが検出されているが、特に早期の遺構と遺物についての概要を述べる。

遺構

早期の遺構は集石遺構と土塊が検出されている。集石遺構は、54基検出され、その分布は、丘陵の尾根にあたるB・C-3区、H・I-3区、J-6区、丘陵の西斜面にあたるF・G

—4・5区を中心とし、分布状態から集石遺構は4群に分けることができる。H・I-3区の集石遺構群の上部には焼石群があり、焼石の密な部分の下部においては集石遺構が検出されている。しかしながら、焼石群の状態から集石遺構のプランを確認することは困難であった。また、焼石群は、J-6区、B・C-5・6区にもあり、後者の焼石群はB・C-3区の集石遺構に関連するものと思われる。

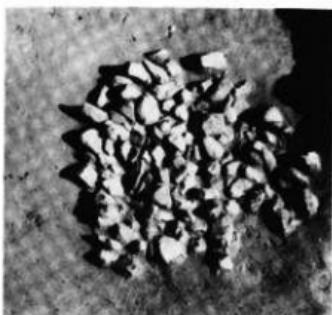
調査区内では平坦地形を示すF・G-3区で検出された集石遺構は少ない。この区においては、石組遺構が検出されており、また、土器やチップ等が多く出土している。

集石遺構は、小児頭大から拳大の焼石が径0.7~2m前後の円形ないし楕円状に集石している。その下部に土壌を伴うものや土壌を伴わず単に平面的集石のものもある。前者の例が多い。焼石は、砂岩質の角礫を使用し、熱のため赤色に変色し脆くなっている。中には煤あるいはタール状の物質が付着するものもある。

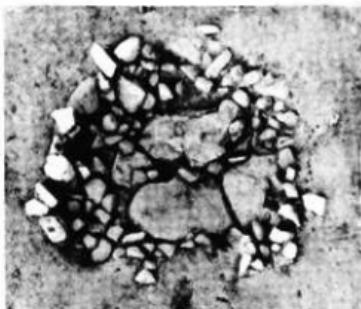
6号集石遺構はJ-3区で検出された。拳大の焼石が円形に集石し、その下部に楕円形プランを呈するすり鉢状の土壌がある。長径90cm、短径85cm、深さ25cmを測る。土壌内には焼石が結っているが、床面より6cm程浮いた状態である。土壌内の下部の埋土は黒色ないし黒褐色を呈し、炭化粒が多くみられた。

10号集石遺構は、I-3区の焼石群を除去した後、そのプランを確認したものである。拳大の焼石が楕円状に集石し、その下部に同様なプランを呈する土壌があり、長径95cm、短径80cm、深さ20cmを測る。土壌内床面の焼石はやや大きく敷石状をなす。

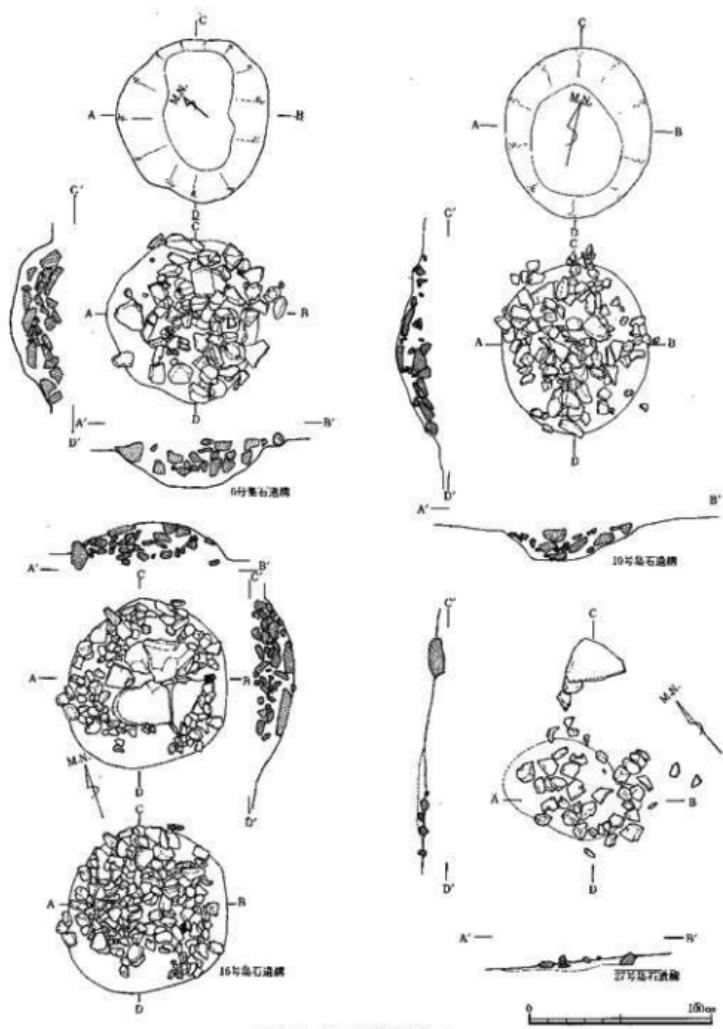
16号集石遺構は、H-2区で検出された。拳大の焼石が円形状に集石し、その下部に円形プランの土壌がある。土壌は径95cm、深さ20cmを測る。床面中央には、30cm×25cm前後の偏平な河原石による敷石があり、河原石は熱のため変色して脆くなっている。敷石



第16号集石遺構検出状況



第16号集石遺構



第7図 集石造構実測図

直上においては炭化材や炭化粒が出土し、下部の埋土も黒色ないし黒褐色を呈している。床面中央に偏平な河原石による敷石のある集石造構は、今回の調査ではG-4区52号集石造構でもみられた。

27号集石造構は、G-5区丘陵西斜面で検出された。挙大の焼石が椭円状に集石するが、下部に土壤を伴わないものである。

土壤は、長方形ないし隅丸長方形を呈するものがE-3区の焼石群の下部及びC-3区で検出されている。E-3区では、125cm×75cm前後を測り、深さの浅い土壤2基及び深さが70cm前後と深く、160cm×100cm前後の長方形ないし隅丸長方形プランの土壤4～5基が切り合った状態のものが検出されている。後者の2基においては、短辺の隅において河原石の集石もみられた。切り合った土壤の新旧については不明である。

C-3区では、深さ80cm、150cm×110cm前後を測る隅丸長方形プランの土壤と深さ20cm、70cm×190cm前後を測る長方形プランの土壤が切り合って検出されている。切り合い関係から後者が新しい。

E-3区、C-3区で検出された土壤の埋土は、小白斑を含む硬質の黒褐色土であり、4～5基が切り合っていた土壤内からは貝殻条痕文土器が出土しており、土壤は集石造構と同時期のものと考えられる。



E-3区 土 壤

遺 物

縄文早期の遺物は土器と石器である。土器は、押型文土器、貝殻文土器、無文土器等があり、文様・器形等からⅠ類からⅩ類に大別される。

Ⅰ類土器は橢円押型文である。器形は、口縁部が外反するもの、直口のもの、胴部が膨み口縁部が短く外反するものがある。底部は平底のものが出土している。橢円文は縦位のもの、横位のものがある。第8図2は、厚さが0.5cm前後と薄く、幅1cmほどの無文帯があり、口縁内面に斜沈線がある。

Ⅱ類土器は山形押型文とした。第8図8は、横位の山形文で幅1cmの無文帯がある。

Ⅲ類土器は、口縁部が円なりに外反し、外面に縦位、内面に横位の山形押型文が施文されている。

Ⅳ類土器は、口縁部に横走する条痕文があり、その下部に山形押型文が施文された円筒形の土器である。口唇部は丸く、厚さ約1cmと厚い。

Ⅴ類土器は、円筒形を呈し、口縁端部にヘラあるいは貝殻による圧痕文のある土器である。胴部に大半は貝殻条痕文を有すが、第8図16のように貝殻条痕文のないものもある。

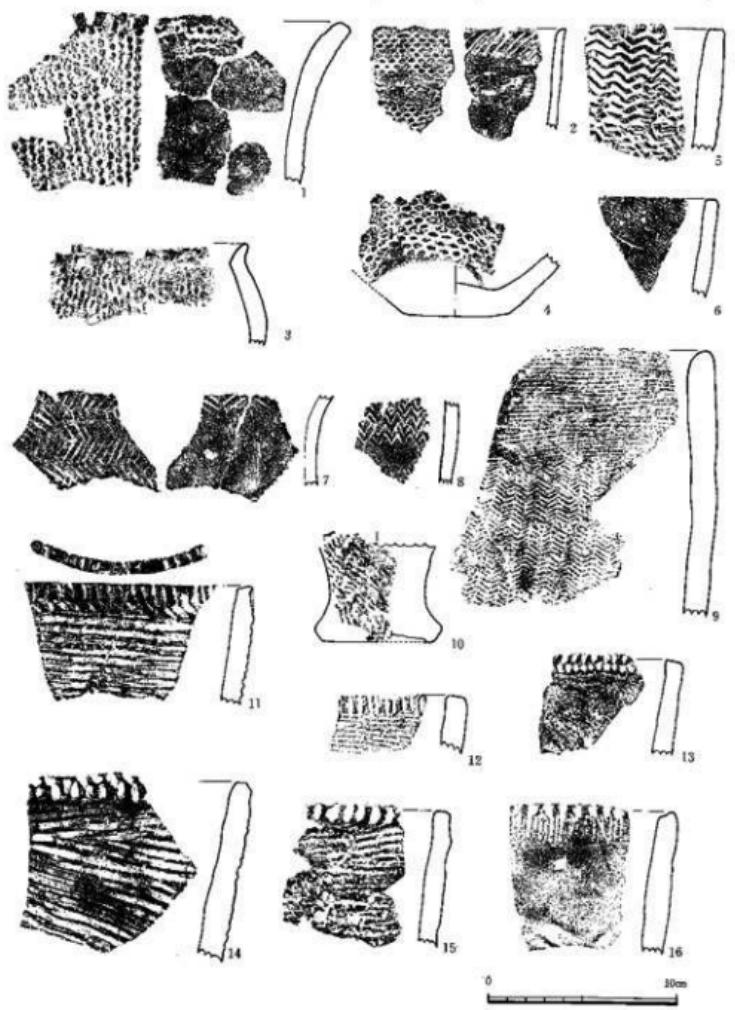
Ⅵ類土器は、貝殻腹縁刺突線文のある土器である。器形は円筒形、角筒形がある。第9図1は、口縁端部に三条の貝殻腹縁刺突線文があり、胴部には、1点から末広がりの貝殻腹縁刺突線文がある。内面はナデ調整である。2は、角筒土器の胴部下半で地文としての貝殻条痕文の上に貝殻腹縁刺突線文が、角部に貝殻腹縁押圧文が施文されている。内面ヘラ削りである。

Ⅶ類土器は、口縁部が外反し、口唇部は丸くおさめられている。外面に貝殻条痕文が施文されている。内面は丁寧なヘラ磨きである。

Ⅷ類土器は、口縁部が直口し、外面に2単位の貝殻条痕文が無難作に施文されている。円形をなす穿孔が1ヶ所ある。

Ⅸ類土器は、口縁部が内湾し、口唇部が平坦で若干肥厚する土器である。第9図7は、櫛様のものを施文具とした三段ないし四段の連点文間にヘラによる羽状文があり、6は、口縁端部に沈線文、その下にヘラによる羽状文が施文されている。10は、櫛様の施文具による連点文が無難作に施文されている。6~8.10の内面はヘラ磨きである。9は無文で内面にヘラ磨きはみられない。11は、器形はⅨ類に類似するが、棒状のものを施文具とした連点文が口縁部、口唇部に施文されており、また、ヘラによる曲線文様もある。

Ⅹ類土器は、口唇部が丸くおさめられ、口縁部がわずかに外反する土器である。外面に浅



第8図 出土土器実測図(1)



第9図 出土土器実測図(2)

い縦位の条痕文がある。内面はヘラ磨きである。

XI類は、無文の土器である。15は、肩部が若干張り、口縁部は直口ぎみである。円形の穿孔が1ヶ所ある。

XII類に分類された土器の出土量は、III、IV、VI~VII、X、XI類は10点以内で、I、II、VIII類は20点前後が出土している。

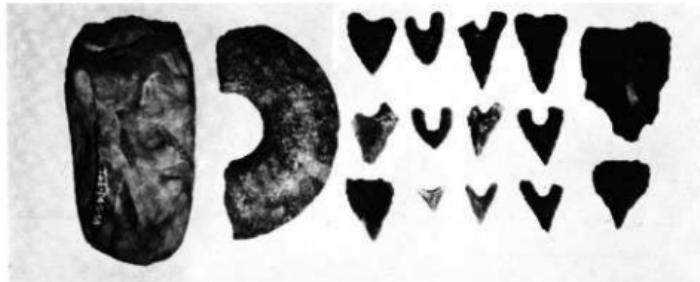
石器は、石鎌、尖頭状石器、磨石、局部磨製石斧、スクレイバー、石匙、環状石斧、円盤状石器、礫器等が出土している。石鎌は約200点、磨石は約40点出土しているが、他の石器は数点出しているのみである。

石鎌は、基部が丸味をおびる円基鎌が数点あるが、他は基部に抉りのある凹基無茎鎌である。凹基無茎鎌には、剥片鎌、歎形鎌、長脚の鎌があり、特に歎形鎌の出土量が多い。石鎌の素材としてはチャート製のものが多く、この他、安山岩、黒耀石のものもあるがその量は少ない。黒耀石の中には姫島産のものもある。

環状石斧は、H-3区の焼石群より出土したものである。硬砂岩製で復元径8.4cm、孔径2.5cm、厚さ1.6cmを測る。全周とも丁寧に磨研されている。孔内の稜にあたる部分は、磨れて丸くなっている、棒状のものをさし込んだものと思われる。刃部には刃こぼれも見られる。

局部磨製石斧は、短柄型の石斧である。チャート質の石を素材とし、片面に自然面を残し片面には剥離を残すが、両側縁は縁どりされている。刃部は欠損し、現長9.6cm、幅5cmを測る。

円盤状石器は、C-4区の焼石群で出土する。板石状に剥離する砂岩質の石を素材とし、外周は両面からの剥離により円形に成形している。径10.8cm、厚さ1cmを測る。



出土石器

III. ま と め

芳ヶ迫第1遺跡の調査では、旧石器時代、縄文時代（早期・晚期）の遺構・遺物が検出された。旧石器時代の調査は、B・C-3区と限定された調査であったが、集石遺構2基が検出された他1ユニットとして把握できる遺物の分布の中でナイフ形石器、剝片尖頭器、三棱尖頭器及び剝片等が出土していることは、今後、旧石器時代の研究をすすめるうえで好資料である。

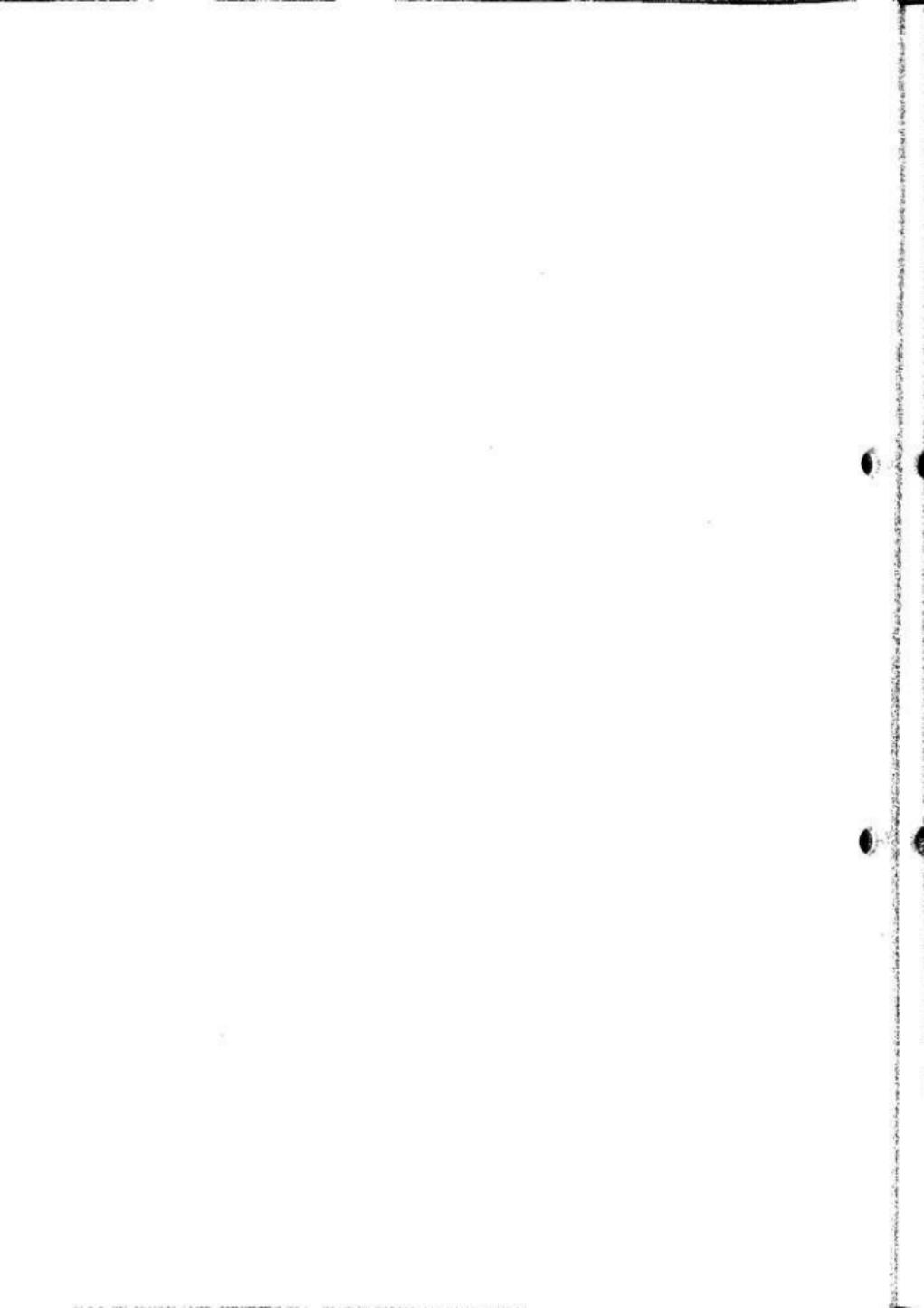
縄文時代早期の遺構は、集石遺構、焼石群、石組遺構、土壙が検出されている。集石遺構は54基検出され、その分布は、丘陵の尾根にあたるB・C-3区、H・I-3区、J-6区及び丘陵の西斜面にあたるF・G-4・5区を中心としており、集石遺構は径10~15m前後を範囲とする群としてグルーピングされる。当丘陵では最も緩斜面で平坦面的地形を呈するF・G-3区においては、集石遺構の分布は粗である。しかしながら炉跡と考えられる石組遺構が検出され、土器やチャートを中心としたチップ等が多く出土していることは、F・G-3区で住居跡は検出されていないが、居住的空間であったと思われる。

焼石群は、焼石が厚さ10cm前後の層をなすものが4群確認されている。このような焼石群は、宮崎学園都市7号地遺跡、西都市大口川遺跡等でも知られているが、その性格については不明である。芳ヶ迫第1遺跡では、焼石群が集石遺構上あるいは近接して検出されており、その分布状況からこれら焼石は廃棄場である可能性がある。ただ、D・E-3区の焼石群の下部では土壙が検出されているので他の焼石群とは異なる性格のものかもしれない。

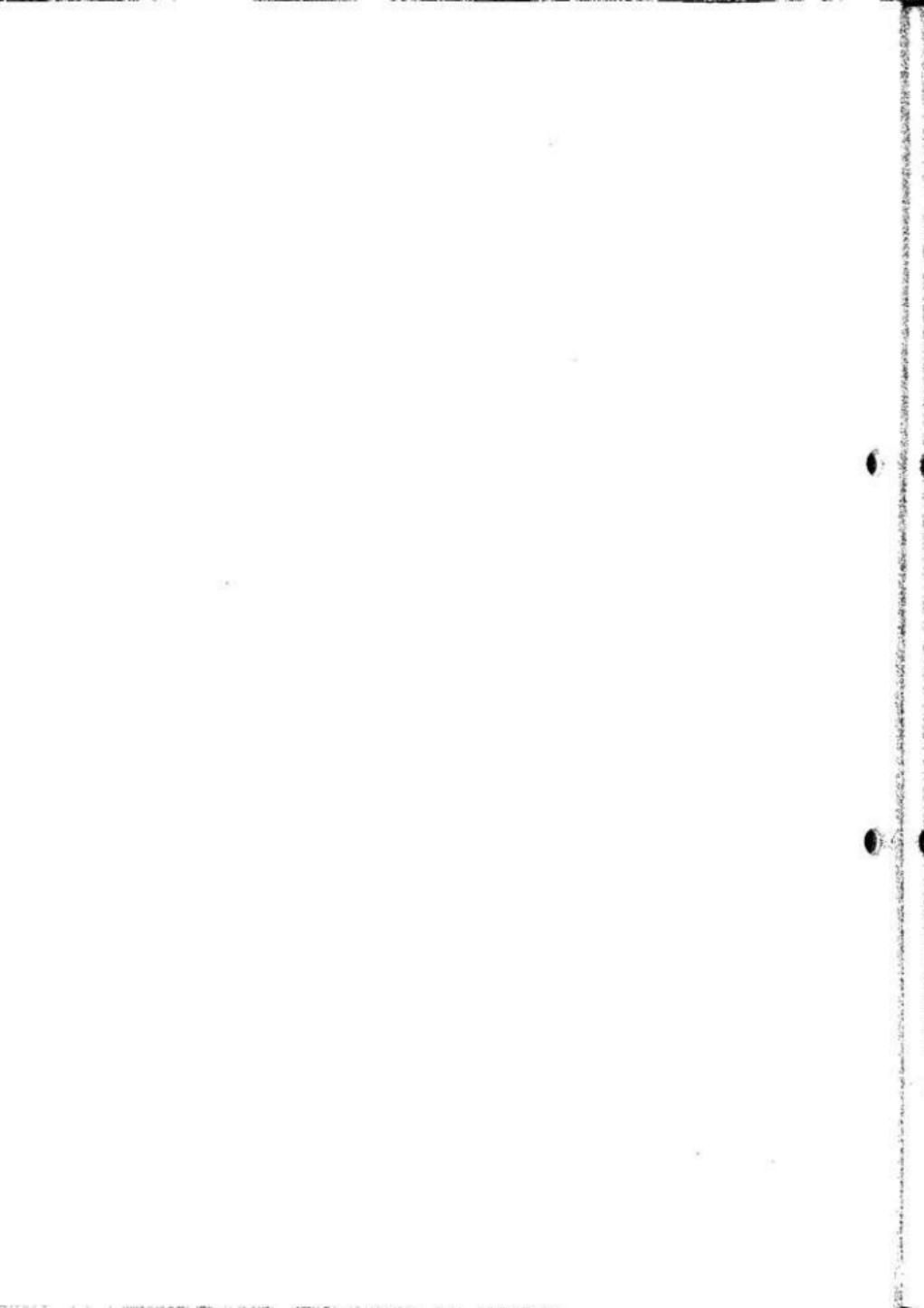
芳ヶ迫第1遺跡では集石遺構が54基検出され、大半が下に土壙を伴っている。土壙は、2段掘りとなっていたNo.4集石遺構の土壙以外は、径1~2mのすり鉢状を呈する。土壙内は偏平な河原石による配石をもつものもある。土壙床面付近では、炭化材や炭化粒が多く出土し、また、焼石に媒あるいはタール状物質が付着するものがあり、集石遺構の機能は炉の機能を考えられそうである。

集石遺構に伴って出土した土器は、縄文早期の押型文土器、吉田・前平式に類似する貝殻文土器（V・VI類）、桑ノ丸3類に類似する口縁部が内湾する土器（IX類）等で、塞ノ神式は出土していない。石器は石鎚が大半を占めている。石鎚はいわゆる錐形鎚の占める比率が高く、石材はチャート質のものが多い。昨年12月からは、田野町教育委員会では農業団地造成に伴い又五郎遺跡の調査が行っているが、出土土器は塞ノ神式土器が主体である。石鎚は錐形鎚の占める割合が減少し、石材も黒耀石のものが多くなっており、時期により石鎚の形態及び石材が変化していることを示している。

芳ヶ迫第1遺跡では、集石遺構の分布状況、群構成、形態や出土遺物等に注目される資料が得られているが、今後の課題としておきたい。



付 編



芳ヶ迫第1遺跡の花粉分析的研究

中村 純

昭和58年10月下旬、遺跡発掘現場を訪れ、花粉分析的調査を目的として次の地点から資料を探取した。

1. J-3及びH-3: いずれも集石遺構の包含層

2. F-6: 遺跡表層より40cm下層までの堆積層

これらの堆積層はいずれも非低湿地の火山灰質黒褐色又は黄褐色ローム層である。

中に含まれる植物質の風化分解ははげしく多量の腐植を含んでいるが肉眼的な植物質はほとんど含んでいない。したがって花粉遺体の堆積量もきわめて微量で普通の花粉抽出法では抽出不可能であった。

そこで予め資料をHF(40%)に浸漬して火山灰質を除いたのち普通のZnCl₂-アセトリシス法で処理した。また抽出される花粉がきわめて微量であるので超小型の遠心管を用いることが必要であった。このような特殊な抽出法によっても検出花粉は少量で分析結果の統計学的処理ができない資料もあった。

1. 集石遺構包含層の花粉分析結果

資料はJ-3及びH-3の両地点のものであつたがH-3は全く花粉を含まず、J-3の結果のみを述べる。黄褐色ローム層、黒褐色ローム層ともに花粉残存量は少なく統計的処理は不可能なので、検出花粉の粒数を表1に示した。さきに述べたように花粉の保存状態は劣悪で残存する種類数も少く、かつ分解に対して抵抗の大きい種類に限られる傾向が強い。したがって分析結果から当時の植生を詳細に復元することは困難であった。

ただ表1に○印を付した種類は照葉樹林の構成種であり、またサカキカズラのように花粉の生産量、散布範囲ともに小さい種類が検出されたことは現地点にこれら照葉樹が生育

表1 J-3の花粉粒数

		A	B
Pinus	マツ属	1	8
Abies	モミ属	1	2
Tsuga	ツガ属	3	1
O Podocarpus	ナギ属	0	9
O Cyclobalanopsis	カシ属	0	2
Quercus	コナラ属	3	4
Symplocos	ハイノキ属	1	1
O Myrica	ヤマモモ属	4	3
Ulmus	ニレ属	1	1
Tilia	シナノキ属	4	1
Pterocarya	サワグルミ属	1	0
Xanthoxylum	カラスサンショウ属	1	
Artemisia	ヨモギ属	6	11
Compositac	キリ科	15	16
Cardamine	タネツケバナ属	8	0
O Anodendron	サカキカズラ属	2	3
Gramineae	イネ科	6	5
O Pteris	イノモトソウ属	8	8
A 黒褐色ローム層			
B 黄褐色ローム層			
O 照葉樹林要素			

していたことを物語っている。

またシナノキのような典型的北温帯樹種でしかも花粉生産量、散布範囲ともに小さい種類も出現することは南北両温帯種の混在が現在以上であったこと、つまり氷河時代末の植生の影響がまだ色濃く残っていたことも十分考えられる。

草本類ではヨモギ、その他のキク科やイネ科草本が多く見られることはこれらの繁茂する荒地が近くに展開していたことも推測される。

2. F-6の花粉分析結果

二次堆積の「赤ほや」層にのる表層より約40cmの堆積物である、黒褐色のローム層で10cmごとに採取した、花粉は辛うじて統計処理が可能な程度抽出することができた。検出された花粉、胞子の種類は表2に示した。

表2 F-16の検出花粉

1. 木本類

Pinus	マツ属
Abies	モミ属
Tsuga	ツガ属
Podocarpus	ナギ属
Cryptomeria	スギ属
Cyclobalanopsis	カシ属
Quercus	ナラ属
Castanopsis	シイ属
Passania	マテバシイ属
Myrica	ヤマモモ属
Alnus	ハンノキ属
Carpinus	シデ属
Randia	ミサオノキ属
Lasianthus	ルリミノキ属
Ligustrum	ネズミモチ属
Helicia	ヤマモガシ属
Symplocos	ハイノキ属
Celtis, Aphananthe	エノキ、ムクノキ属
Zelkova	ケヤキ属
Styrax	エゴノキ属
Cornus	ミズキ属
Rhus	ハゼノキ属
Mallotus	アカメガシワ属
Zanthoxylum	カラスサンショウ属
Acer	カエデ属

2. 草本類

Caryophyllaceae	ナデシコ科
Humulus	カナムグラ属
Anodendron	サカキカズラ属
Viscum	ヤドリギ属
Trachelospermum	ティカカズラ属
Salviaceae	シソ科
Halolagis	アリノトウグサ属
Geranium	フウロソウ属
Patrinia	オトコエシ属
Artemisia	ヨモギ属
Compositae	その他のキク科
Kummerovia	ミチヤナギ属
Indigofera	ニワフジ属
Rosa	イバラ属
Ranunculus	ウマノアシガタ属
Polygala	ヒメハギ属
Vitis	ブドウ属
Reynoutria	イタドリ属
Fagopyrum	ソバ属
Cardamine	タネツケバナ属
Lonicera	スイカズラ属
Justicia	キツネノマゴ属
Chenopodium	アカザ属
Gramineae	イネ科
Osmunda	ゼンマイ属
other fern apores	その他のシダ類

それらのなかで主な種類の各層ごとの出現%を図示すると図1のようになる。木本花粉数を基本数として%で示してある。

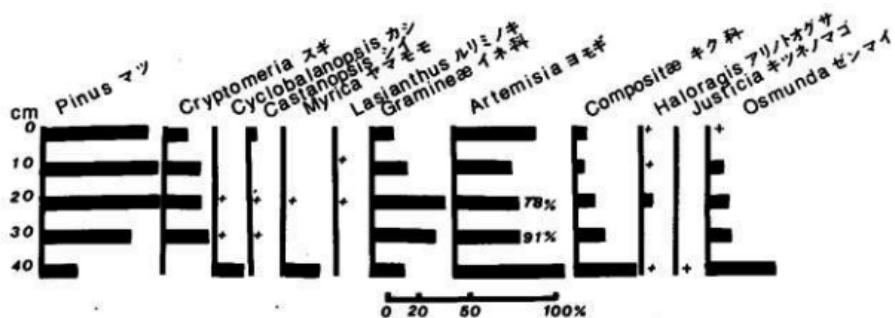
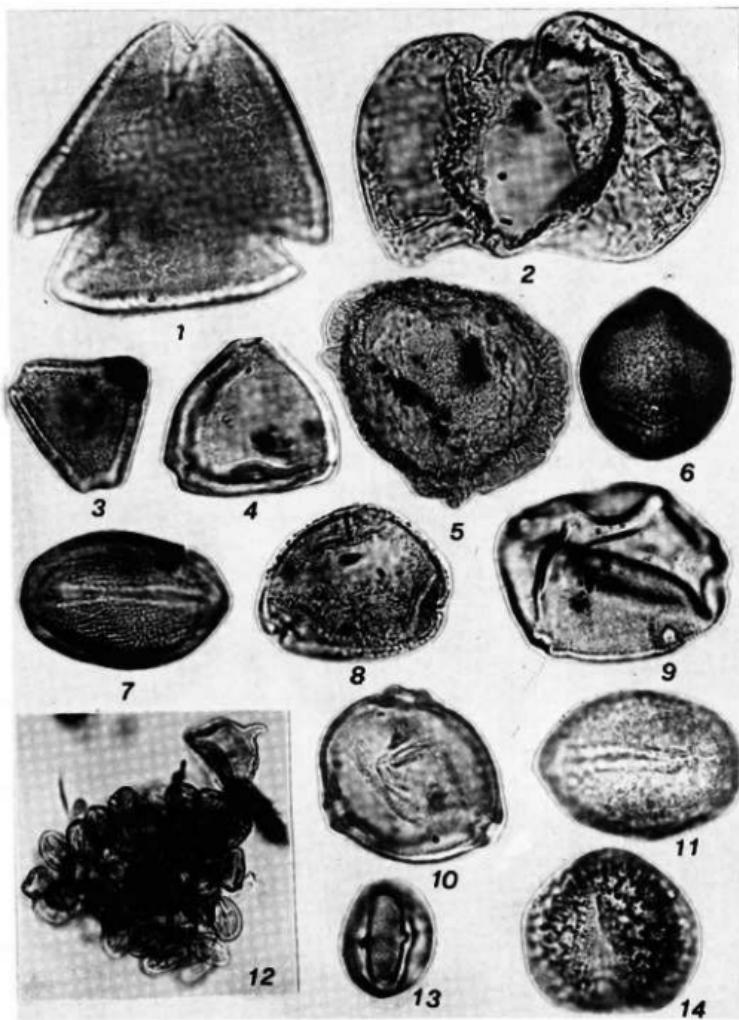


図1 F-6における花粉分布図

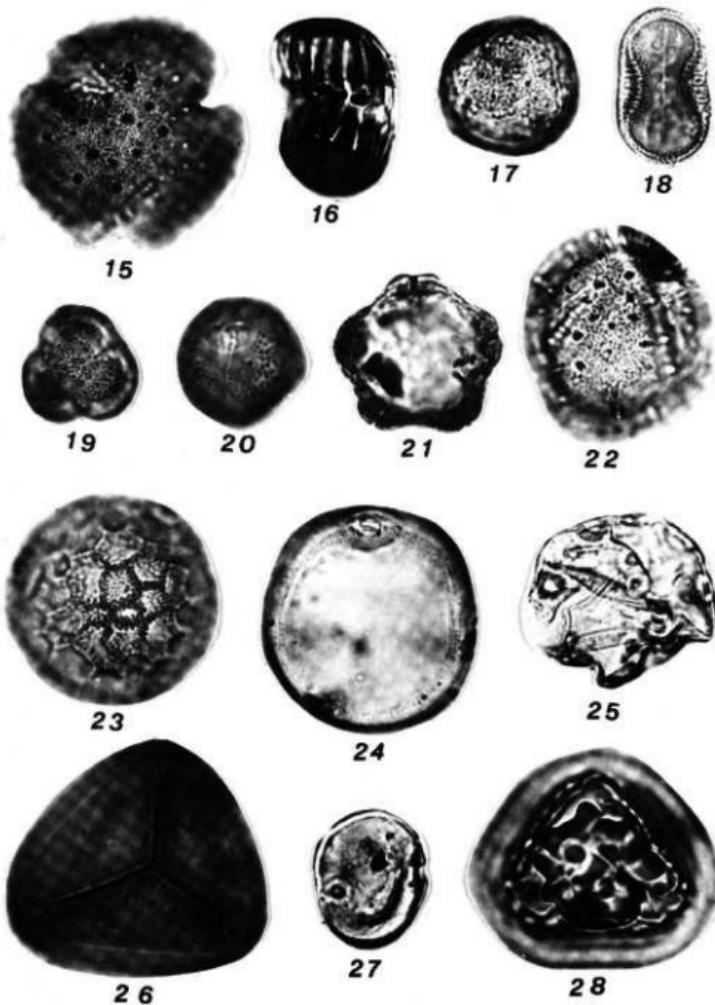
図に示したようにマツ属は最下層で少く、上に向って急増する。スギは-30cmより突如出現し、この地方にスギ植林のはじまったことを示している。その他の木本類はいづれも散発的でかつ低率である。カシ、ヤマモモは上層に向って減少し、マツと逆の傾向を示している。おそらく-40cm頃まであった照葉樹林がマツ、スギの植林地に変わったことを示しているのであろう。

草本類ではヨモギを含んでキク科やイネ科が多く、またキツネノマゴのような弥生時代以降出現する農耕地雜草が下層から出現することから現地付近は耕地を含む草地が拡がって現在に至ったらしい。またその年代に関しては40~30cmでマツが急増するがこれは各地に共通してみられる時代で1000~1500年前に相当するとみるべきであろう。

1. <i>Lasianthus</i>	ルリミノキ属	×1000	F - 6 - 40cm
2. <i>Podocarpus</i>	ナギ属	×1000	J - 3 - B
3. <i>Helicia</i>	ヤマモガシ属	×1000	F - 6 - 30cm
4. <i>Myrica</i>	ヤマモモ属	×1000	F - 6 - 0 cm
5. <i>Tsuga</i>	ツガ属	×500	J - 3 - B
6. <i>Styrax</i>	エゴノキ属	×1000	F - 6 - 0 cm
7. <i>Acer</i>	カヘデ属	×1000	F - 6 - 30cm
8. <i>Symplocos</i>	ハイノキ属	×1000	J - 3 - B
9. <i>Pterocarya</i>	サワグルミ属	×1000	J - 3 - B
10. <i>Betula</i>	カバノキ属	×1000	F - 6 - 0 cm
11. <i>Quercus</i>	ナラ属	×1000	J - 3 - B
12. <i>Castanopsis</i> , シイ属	Cryptomeria	スギ属 (右上)	
		×500	F - 6 - 0 cm
13. <i>Castanopsis</i>	シイ属	×1000	F - 6 - 0 cm
14. <i>Ligustrum</i>	ネズミモチ属	×1000	F - 6 - 40cm



15. <i>Patrinia</i>	オトコエシ属	×1000	F-6-0 cm
16. <i>Polygala</i>	ヒメハギ属	×1000	F-6-30cm
17. <i>Ranunculus</i>	ウマノアシガタ属	×1000	F-6-30cm
18. <i>Justicia</i>	キツネノマゴ属	×1000	F-6-40cm
19. <i>Artemisia</i>	ヨモギ属	×1000	F-6-30cm
20. <i>Kummerovia</i>	ミチヤナギ属	×1000	F-6-0 cm
21. <i>Haloragis</i>	アリノトウグサ属	×1000	F-6-0 cm
22. <i>Viscum</i>	ヤドリギ属	×1000	F-6-40cm
23. <i>Persicaria</i>	タデ属	×1000	F-6-0 cm
24. <i>Gramineae</i>	イネ科	×1000	J-3-B
25. <i>Trachelospermum</i>	ティカカズラ属	×1000	F-6-40cm
26. <i>Lygodium</i>	カニクサ属	×500	F-6-0 cm
27. <i>Anodendron</i>	サカキカズラ属	×1000	J-3-B
28. <i>Pteris</i>	イノモトソウ属	×1000	J-3-A



田野町札ノ元遺跡試掘溝に見られる堆積物の検討

柴田 喜太郎

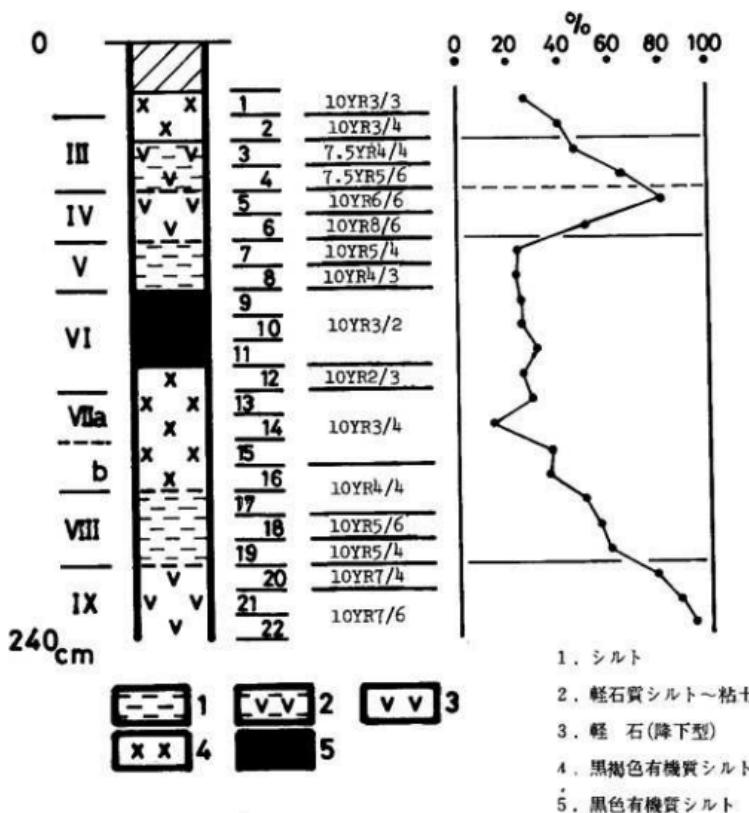
堆積物中に含まれる火山噴出物について、その包含層準を正確に把握することは、遺物や造構の年代を知る上で、さらに広域に堆積物の対比を行なう上で重要なことである。

川野町札ノ元遺跡の試掘溝壁面より採取した試料22コ（最上部20cmは耕作土であるので除外し、その下2m 20cmまでの試料）について、火山噴出物が含まれる層準の概要を知るために、堆積物中に含まれる火山ガラスの含有率を検討した。

分析方法は、試料に含まれる微細砂（粒径 $\frac{1}{16}$ mm～ $\frac{1}{64}$ mm）を標準篩を聞いて分離し、プレバーラートを作製、偏光顕微鏡下で鉱物250～300粒中に火山ガラス粒が占める割合を求めた。その結果を第1図に示した。

試料採取地点の壁面において見られる堆積物中に、風化して粘土化した二枚の軽石層があり、宮崎県の研究者の間で、上位のものは“第1オレンジ”、下位のものは“第2オレンジ”と呼ばれている。各々の岩石学的性質や噴出源は今後の検討を要するところであるが、今回検討した火山ガラスの含有率についてみると、第1図の柱状図に示した火山噴出物の層準と火山ガラス含有率が増加する層準が対応している。下位の“第2オレンジ”では軽石層の下限が見られなかった為に、軽石が降下した時点での地表に相当する層準を特定できないが、上位の“第1オレンジ”では試料6と7の中間附近にあったことはほぼ確実で、火山ガラス含有率の増加もその層準で起っている。また“第1および第2オレンジ”的層準から上位に向って火山ガラス含有率が徐々に減少する傾向が見られる。これは試掘溝が位置する斜面の高所から火山ガラスが雨水等によって流入し混入した結果であると考えられる。

火山ガラスの含有率を検討した結果この地点の堆積物中には、先に述べた2層の火山噴出物以外は含まれていないものと考えられる。今度予定している分析によって、より詳細な結果が得られるであろう。



第1図 札ノ元透跡試掘溝の堆積物に含まれる火山ガラスの含有率(粒数 %)

正誤表

頁	行目	誤	正
序	7	と存じます。	と存じます。
タ	10	ご指導を	ご指導と
18	8	「赤ホヤ」	「赤ホヤ」
24	6	標準節を聞いて	標準節を用いて
タ	21	今度予定	今後予定

田野町文化財調査報告書第1集

芳ヶ迫第1遺跡

県営農地開拓事業前字地区に伴う
埋蔵文化財発堀調査概報

発行年月日 昭和59年3月31日
発行行 田野町教育委員会